

## 「第九」歌唱断念の記― “コロナ奴”

大沼幸雄

物事はなかなか期待通りには運ばないことが多い。これはコロナ禍で「第九」の歌唱を断念せざるを得なくなるまでの体験記である。

ボケ防止を願って、数年前から放送大学で選科履修生として毎年5~6科目を気ままに受講している。昨年8月中頃に渋谷学習センターで掲示板の「大学は歌う」プロジェクトの広告が目にとまった。「2019年学位授与式（NHKホール）で第九（原語）と学歌を歌おう！」とある。大写しのカラー写真に善男善女がーと言っても後期高齢者が中心と見たが一力強く腕を天空に向かって突き上げ、「フロイデ！」と意気盛んに叫んでいる。「参加者募集」と赤字で大書き「参加登録は2019年12月31日」とある。「これだ！」とひらめいた。NHKホール歌うというのはメツチャ魅力的だ。こんな機会は、これを逃したら、死ぬまで来るまい。原語とあるのも好ましい。多少ドイツ語をかじったからだ。しかも2020年は、我々が愛するベートーヴェンの生誕250周年なのだ。



放送大学開学記念

もともと合唱などの経験はカラキシない。大学生時代は歌声運動が盛んで構内で男女が集まりロシア民謡を歌っているのを冷ややかに眺めていた。楽器はギターをいじったことがあるが、何せ辛抱が出来ない性質でやめた。ピアノも「猫ふんじゃった」以外は弾けない。それで83才になって「第九」にチャレンジするのは向う見ずなことは分かっている。だが、あたらしい事には何でもチャレンジする性格なのだ。放送大学は、入学試験はないがレッキとした大学である。本部は千葉にある。授業は、テレビ、ラジオ、インターネットが主だが、全国57か所に学習センターがある。その一つ千葉学習センターで「初心者対象ゼミ」があるというのだ。

まずは教材のカワイ出版「ベートーヴェン作曲・交響曲第九番第四楽章 歓喜に寄せて」をアマゾンからネットで仕入れた。8月28日に早速、千葉の幕張へ出かけた。渋谷から半蔵門線、東西線、総武線と乗り継いでDoor to Doorで約2時間、費用総額2,300円で、ほぼ一日がかりである。芸大卒の美声の女性声楽家がエレクトーン伴奏して指導していた。「初心者です」というと「神奈川では楽典から教えるから、そちらが近いし良いでしょう。テナーですか、バスですか」と訊かれた。「よく分からないのですが」言ったら「ではバスで」といわれる。まず発声練習から初めた。「学歌」を歌い、次いで「第九」合唱の一部を歌う。一体、どの部分を歌っているのか見当がつかない。番号を言われたが、それが各小節の番号とやっと分かる始末。そのページをめくる前に皆は歌い始めている。マゴマゴしているうちに2時間が過ぎた。先生からは「姿勢を良くする」「口で歌わない」「鼻から頭へ抜けるように歌う」などを教わる。バスは、どうも自分に合わない。戻ってから佐々木紀夫さんに「僕の声は

テナーとバスどちらですか？」と訊いたら「テナーでしょう」とのこと。プロのお墨付きを得たので意気揚々と次回からテナーに入ることにした。

神奈川県学習センターは、渋谷から東急田園都市線—横浜市営地下鉄線に乗り換えて弘明寺にある。横浜国立大学の元教授のM先生ご夫妻が教えていた。まずM夫人が楽典「音楽の基礎（理論と実践）」を45分間講義し、次いでM先生が夫人のピアノ伴奏に合わせて指揮棒を振って歌唱を指導する。毎回30名～40名位が集まり声域ごとに練習して最後に合唱する方式である。楽典はチンプンカンプン。「長音階、短音階、導音、増2度、長2度、短3度、五度圏等々」まるで異星人の言語だ。日本人の小学生が突然アメリカに転校になったみたいで、ただ「ボーッ」としている他ない。一方歌う方は、何とかついていったが、時々「低すぎる。もっと高く、高く」と指を突き上げて御叱りを受ける。叱られることが無い年なので、たまには叱られるのは快感でもある。「学歌」は、シャープもフラットもないので、「ドレミファ」しか知らない小生でも何とか歌える。ところが「第九」はとてつもない難曲と分かった。第一に、「ザイトウムシュルンゲン」同じ歌詞なのにどれも高さが違うしテンポも違う。第二に、フーガの部分では、自分の部分を始めるタイミングが分からない。第三に、「ダインハイリツヒツーム」の部分で長々とハミングするのだが、到底歌えない。さらには、ベートーヴェン特有の最後の盛り上の部分は、まるで「となりの客はよく柿くう客だ」の早口言葉のように猛スピードで歌うのだが暗譜が難しい。

NHKホールで歌えるためには「暗譜チェック」と呼ばれるテストが3回ある。これをパスしないと落第となる。難行苦行だが、ここ諦めると一巻の終わりだ。お手本をテープに入れて公園で放唱したり、全歌詞をドイツ語でタイプし独自のメモを書き込んだりして、一心不乱にまる覚えをした。テストは、3部に分けた試験範囲のうち先生が任意に選んだ部分を突然歌わねばならない。2名ずつ呼び出されピアノに合わせて歌うのだが、ヤマが当たり2回のテストは何とか無事パスした。あと1回だ。ところが試験の前日の2月19日に、突如、センター長の命令でコロナ情勢による練習中止の連絡があり、矢継ぎ早に次の日に3月21日予定の学位授与式自体が中止となる旨の通達が入った。これは一大ショックであった。たった7分あまりの「第九」最終楽章の合唱部分を歌うために、昨年8月末から22回も足を運び、多大の時間、カネ、エネルギーを費やした。その努力が全てフイになったのだ。

だが悪い事ばかりではない。山本直純氏のご子息山本純ノ助先生の指揮により関東一円から100名程集まる全体練習が2回あった。合唱を通して聴くと、ぞくぞくする興奮を感じる。ベートーヴェンの宇宙観に根差した崇高で深遠な世界を垣間見た気がするのだ。また「第九」の鑑賞力が一段と高まった気もする。一方、家内は、「お蔭で姿勢が良くなった。滑舌も良くなった」と言う。

「コロナ奴」と恨みながら、再度、「第九」にチャレンジできるチャンス到来を辛抱つよく待つ今日この頃である。

以上